

# 夢をつづなぐ

南米ハワイのウチナー社会

< 3 >

県人移民九十五周年を迎えたブラジルでは五世も珍しくない。ブラジル国籍の三世、四世の若い世代は、県費留学生などで沖繩と直に触れて初めて、ウチナーンチュのアイデンティティを感じた人も少なくない。

稲嶺憲一知事ら南米訪問団と元留学生ら約四十人の交流夕食会では、自身のルーツとなる沖繩への熱い思いが語られた。県費留学生と技術研修生でつくるうりずん会の

## 発展担う3、4世

チユ。會じいちゃんと言っていた『島クトウバ(言葉)やワシラン(忘れない)、島又クトウバワシラン』という言葉が、今はよく分かるようになった」と言う。移民百周年に向け、記念誌の執筆にかかわりたいと考えている。

〇二年度にジュニアスタディーツアーに参加した与儀エリカさんは「親類の優しさ、ウチナーンチュの温かさを体いっぱい感じて帰ってきた。ウチナーンチュの誇りを持ってブラジルの学校で勉強したい」と話した。

留学生や研修生の多くが同様の経験をしている。

ブラジルの県費留学生や研修生と交流を深めた稲嶺知事ら南米訪問団＝8月23日夜、サンパウロ市内



### 「世代の懸け橋」と自負

二世の登川イレーネさん(三巴)は〇二年度に県や旅行社などで研修した。「自分は日系人と思っていたが、研修前は沖繩に興味はなかった」と率直に話す。

沖繩から帰って祖母と親密さが増し、姉妹にも沖繩の話ばかりしているという。「今はウチナーンチュ。また沖繩に戻りたい」と声を弾ませた。

三世、四世は見た目はウチナーンチュだが、男女の区別なく、あいさつで互いの頬を合わせるしぐさはブラジル人そのものだ。沖繩から帰った彼らに共通するのは、熱心に日本語の勉強に取り組

み、ウチナーグチを学ぶことに試みることだ。

系会長は「僕らはブラジル人の気持ちも入るし、一世の気持ちも入る。ちょうど真ん中にある。ちょうど真ん中にある。県系人社会の懸け橋になる」と、これからの県系人社会の展を担う自負を込めて、ブラジルに限らず、民先の子弟を県内に迎入れる研修制度の継承は、各国県人会、最も強い要望がある。県を含めた県系人ネットワークを構築するたても、次世代への県人承は不可欠だ。

(政経部・外間)

ブラジル下